



## 星祭の夜

---

日本のどこかのある小さな町

星祭りの夜、ジョバンニと織江は銀河鉄道に乗って旅をします。

そこで、二人が出会った人たちは……

ジョバンニのおじいさんがまだ子どものころ、

この町で実際に起こった物語とは……

世界中の人から愛される宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を元にした

小さな物語

「星祭の夜」

登場人物

ジョバンニ（二十歳）  
織江（二十歳） ジョバンニの友達  
母親（四十歳） ミノルの母親  
先生（三十歳） ミノルの担任の先生  
車掌 男

1 公園

夏の夕暮れである。

地方都市の町はずれにある丘の中腹の公園。背景に公園から見える町の家並みがシルエツト風に映っており、左手のほうに大きなマネキ猫の看板がひときわ目立って輝いている。

舞台の端にベンチが二つ。その一つにジョバンニが座っている。ジョバンニはスヌーピーのように耳の長い犬のおもちやを手にもって、しきりに眺めている。

織江が自転車を押しながら登場する。急いできたのか息をきらせている。

織江 ジョバンニさん。

ジョバンニ あ、遅かったね。もうたくさん町の人が上のほうにいったよ。確か君の会社の人も何人がきていたよ。

織江 もっと早くくるつもりやったんやけどね。今日は、ほら今度うちで印刷することになった新しい本の原稿打ちがあったでしょう。

ジョバンニ ワープロ？

織江 そう、今度の本はお坊さんが読むような本で漢字ばかり。目が痛くなったわ。

ジョバンニ どんな本なんや。

織江 （少しふざけたように）南無般若波羅蜜多。

ジョバンニ なんや、それ。まるでお経じゃないか。

織江 遅くなってしまったから会社の自転車を借りてきたら、途中でパンクして、ほんとについてないんやから。

言いながら、ジヨバンニの座っているベンチの横に立かけた自転車を蹴飛ばす。すると自転車はジヨバンニのほうに倒れていって、よけようとしたジヨバンニはベンチごとひっくり返ってしまふ。

ジヨバンニ（起き上がりながら）でも君の会社もたくさんパソコンが入って仕事は楽になったんやろ。

織江 そうね。このごろはなんでもパソコン。昔は小さな活字をひとつひとつ活字の箱に並べていったんやて古い人が言ってたけど、何だかそのころがなつかしいような気がするわ。

ジヨバンニ 僕の小さい頃にはまだ活字があつたし、活字を並べて本を作るのは覚えているよ。

織江 わたしってほら、新しい機械に弱いでしょう。マッキントッシュやマックやマクドナルドが頭の中でごっちゃになって、このあいだも大阪の日本橋の電気屋でマクドナルドのパソコンを見せてほしいっていったら、ハンバーグやったら隣に行つてといわれたりして、泣きたくなつてもたわ。

突然、ジヨバンニのもっている犬が耳を大きくふつて、笑いだす。実はこの犬はおなか押すと笑うようになつていて、ジヨバンニがうっかり押してしまつたのである。織江が犬を睨んでから、突然ひっぱたく。犬が舞台に転がって、あわててジヨバンニが拾いにいく。

織江 どうしたのよ。そのへんな犬のおもちや

ジヨバンニ このベンチに置いてあつたんや。たぶん、丘の上へ登つていった人の誰かが忘れていったんやと思うよ。

織江（暫く犬を睨んでいたが、突然やさしくなつて）そういえば、ジヨバンニさんのおじいさんも、昔私の会社で働いていたんでしょ。

ジヨバンニ 学校から帰つてきてから活字を拾うアルバイトをしていたと言つていた。ぼくのおじいさんにはお父さんがいなかったからね。でもそのころは今みたいな印刷会社ではなく、活版所といてね、場所も町外れのほら貨物列車の走る線路の脇にあつたらしいよ。

ジヨバン二と織江はしばらく町のほう（客席）をみている。あたりはすこし暗くなる。けれどもまねき猫の看板はしっかりと光っている。

織江 暗くなってきたわ。もうそろそろ町の明かりが全部消えるころね。

ジヨバン二 そうやね。星祭りの日は町の人達の申し合わせで、明かりを全部消すことになっているはずなんや。

織江 昔は星祭りのことをケンタウルス祭ってゆうたんやてね。

ジヨバン二 おじいさんはいつもそういつてたけど、今ではそんなむつかしい言い方はしないよ。

織江（町のほう＝客席＝を見ながら）ここから見るとずいぶん家が多いわね。あら、あのばかみたいに大きな猫の看板。あれ何。前からあった？

ジヨバン二 あれは新しくできたスーパーのまねき屋の看板のまねき猫や。

織江 ああ、おかあさんが言ってたスーパーね。何でもお店の店員さんはみんな猫やてウワサの店でしょう。

ジヨバン二 そう。だから魚はみんな開店前に店員が食べなくても、客が買いにきたら何も残ってないんや。

まねき猫の看板が点滅を始める。

織江 でも星祭りの日はあかりを消すことになっているのに。知らないのかしら。前も星祭りの日に一晩中明かりをつけていたパチンコ屋のふくろうの看板が、次の日に行方不明になったことがあったわね。結局三日ほどしてから川に浮かんでいるのが発見されたんやけど、覚えていない。

まねき猫の看板の点滅が速くなり突然消える。舞台もしだいに暗くなってもうほとんど二人の姿はみえない。

ジヨバン二 ほくは、星祭りのはじまりがおじいさんと関係があることを、お父さんに教えてもらった。

織江 おじいさんがまだ子供のころ、この町の川で一人の子供が流されておぼれかかったんでしょ。

ジヨバンニ その子供をおじいさんの友達のカムパネルラが助けようとして川へ入ったんだ。子供は助かったけどカムパネルラは流されてしまった。みんなで必死に捜したそうだけど、カムパネルラは帰ってはこなかった。カムパネルラは小さい子供のかわりにしんだんだ。

織江 それで、その晩のことよね。ジヨバンニさんのおじいさんが不思議な夢をみたのは。

ジヨバンニ そうなんだ。それは不思議な夢で、おじいさんはカムパネルラと一緒に星空の中の鉄道に乗って旅をしたんだ。

織江 その列車の中で不思議な人たちに出会うのよね。鳥を捕まえて雪のようにさらさらにしてしまうおじいさんとか 乗っている船が氷山にぶつかって沈んでしまったために旅をしている女の子とか。

ジヨバンニ そして、その話を聞いた一人の詩人が童話に書いた。それは「銀河鉄道の夜」というとても有名な童話で、それからこの町の人たちは、毎年その日にこの丘に登って星を眺めるようになったんだ。

## 2 銀河

舞台中央に公園のベンチが二つ列車の客席のように、向かいあわせに置いたある客席の一つにジヨバンニと織江が、もう一つの客席にミノルの母親とミノルの担任だった先生が座っており、ジヨバンニと母親が向かい合わせて観客側、織江と先生が向かい合わせて奥側に座っている。

背景には星空が広がっている。それは、まるで夜空の中を飛んでいる銀河鉄道のよう。

ミノルの母親が観客席ほうに目をやって何かをしきりに捜している。

車掌が出てくる。

車掌 おくつろぎのところ恐縮ですが、キップを拝見させていただきます。

ジヨバンニと織江と先生は自分のキップを車掌に見せる。母親はまだ車掌が来ているのに気づかない。

車掌 (母親に) すみません。キップを拝見します。

母親 あ、はい。(キップを出す)

車掌 あ、もう三十日も乗ってらっしゃるんですか。一か月以上の長期旅行にはそれなりの割引をさせていただきますから遠慮なくおっしゃって下さい。

ジャバンニと織江は驚いて母親のほうを見る。母親は車掌からキップを返されるとまた観客席のほうに目をやって何かを捜している。

車掌 次は銀河ステーション。次は銀河ステーション。(舞台から出ていく)

ジョバンニ (母親に声をかける) 何を捜しているんですか。

母親 UFO

ジョバンニ え?

母親 UFOを捜しているんです。

ジョバンニ UFOってあのスーパーのまねき屋で売ってる?

織江 それは焼きそばでしょ。

母親 私、映画で見たんです。長い間行方不明になった人がUFOに乗って帰ってくるのを。みんな不思議な力でUFOに引かれて旅をしていたんです。だからミノルもきつとUFOに乗って旅をしているんじゃないかと思っています。

先生 ミノル君は川で溺れかかった小さい子供を助けようとして、子供は助けたんだけど、自分は川に流されてしまったんだ。

ジョバンニ それはいつのことなんですか?

先生 もう三十日も前のことなんだけど、みんなで必死に捜したし、警察や消防署も努力したけど、ミノル君はみつからなかった。

母親 一緒にいた他の子はすぐに近くにいた大人を呼びに行つたのに、その間にミノルは自分で助けようとして・  
・。

織江 それはミノル君は自分を犠牲にして、その子供を助けたんやわ。

母親 いいえ、ミノルはいつも強くなりたい、みんなに強いところを見せたいいつも思っていたから、みんなが見ている前で子供が溺れているのを見て、咄嗟に川に飛

び込んだです。本当は弱い子供なのに。

先生 ぼくもミノル君があんなに勇気のある子供だとは思っていなかったし、最初は信じられなかった。けど、弱い子供ほど本当は強いんだってなんだか思えるような気がするんですよ。

母親 ミノルは不登校児だったんです。二年生になったころから引きこもるようになって、最初は時々学校を休むだけだんですけど、二学期からは全然行かなくなってしまったんです。

先生 確かにあのころ、学校全体が荒れていて、私のクラスも。特に二年生はひどかった。ミノル君のようなまじめなおとなしい生徒には嫌なことが多かった。私自信が本当にどうしていいかわからない状態だったんです。

ジヨバンニ もしかしたらミノル君はいじめにあっていたんじゃないですか。

母親 二年生になったころから学校から帰ったとき服がドロドロになっていたり、お金がなくなったりしていたので、おかしいとは思っていたんです。

織江 じゃあ、ミノル君が引きこもるようになったのは、学校のせいなんやわ。それで、学校に相談されたんですか。

母親 私たちはどうしていいかわからなくなって、何回も学校にいきました。校長先生にも相談にいきました。

先生が校長のような中折れ帽をかぶり、フロックコートを着て席から立ち上がり舞台中央に出てくる。

先生 (校長先生のもりで) いじめがどうのといったって、中学生のころは子供のけんかはよくあることですし、それはきちんと本人の話を聞いて調べてみないと。ともかくミノル君が学校に来ないことにはどうにもなりませんな。

お父さんは不登校は学校が荒れていることが原因だから、学校に行かなくても子供の将来のために優秀な高校にいけるようにしてくれと仰っていますよ、優秀な高校に行くためには内申点が重要なんですよ。内申点は学校に出てきてキチンと試験をうけないと。はっきり言ってミノル君の内申点は0点です。0点では高校の入学試験でいくらがんばってもどうにもなりませんよ。

いじめがどうのというより、大切なのは内申点です。内

申点が子供の将来を決めるのです。いいですか、内申点は学校が判断するんですよ。

母親 学校では相談にならないと思って私たちは県のカウンセラーの先生のところへ相談に行きました。

織江が眼鏡をかけ、カウンセラーの先生のようなスーツを着て舞台中央に出てくる。

織江 (カウンセラーの先生のもりで) 学校なんて信用してはいけません。ミノル君はいじめを受けていたんです。お母さんはミノル君は小学校のときから成績のよくない友達の面倒をみていたとおっしゃっていたでしょう。でもそれは面倒を見させられていたかもしれないんですよ。いじめは小学校にも中学校にも見えないところで広がっているんです。

ともかく今はそつとして何年でもミノル君が学校に行ける時まで待つてあげてください。学校のかわりに私たちの施設に1週間に一度でも来るようにしてください。不登校の子や社会にでていけない子のために専門のカウンセラーの先生がっていますし、私たちの施設は国の教育問題の専門機関の答申に基づいた設立された権威のあるもので、国や県から十分な予算が出ていますからね。

母親 カウンセラーの先生の話聞いてみると、まるでミノルが永遠に普通の学生生活に戻れないような気がして、解決どころか不安が増すばかりでした。それでワラにもすがるともりで新興宗教の教祖様にも相談したんです。

ジヨバンニが長いひげをつけ、羽織をきて新興宗教の教祖のような恰好で舞台中央に出てくる。

ジヨバンニ (教祖のもりで) 特別扱いが一番いけません。施設のカウンセラーなんて不登校の子に来て貰って実績を作りたいから、子供の機嫌ばかり気にしているんですよ。実績をあげないと予算がとれないですからね。あれでは子供のためになるところか、ますます社会に出ていけない弱い子供にしています。嫌もことでも正面からぶつかって社会を生き抜いていく力なんか育ちません。

まずミノル君を鍛えることです。それには体を鍛えなく

てはなりません。外に出ていくためには身を軽くしてジャンプ力をつけることです。毎日、カエル飛びで家の回りを十周すること。食事の時はイナゴとバッタのつくだにをかかさぬこと。ビールのあては焼き鳥にかぎること。毎朝ドリンクを飲んで、今日も元気にVっといこう、アリナミンVドリンク！

母親が席を立って舞台中央に出てくる。

母親 でもある日、ミノルは私たちが心配しているのを見て、三年生になったら学校に行くって言ってくれたんです。そして、本当に三年生になったとたんミノルは学校にいくようになったんです。

でもそれは、学校のおかげでも、カウンセラーの先生のおかげでも、ましてや教祖さまのおかげでもありませんわ。ミノルを学校にいけるようにしてくれたのはお兄ちゃんなんです。

先生 お兄ちゃんか？

織江 お兄ちゃんか？

ジヨバンニ 若の花が？

みんな水をさすなというようにジヨバンニのほうをみる。

先生 お兄ちゃんが叱ったんですか？

織江 何か言っただけですか？

母親 いいえ、叱りもしないし、何も言いません。ミノルが学校に行っていない時も、ただ一緒にごはんを食べて、一緒にテレビを見て一緒にゲームをしていただけですわ。でもそれをみていて私はだんだん私達が心配しなくてもそのうちミノルはちゃんと学校に行けるようになって思えるようになってきたんです。

そのころお兄ちゃんは大学受験の準備をしていました。パソコンが好きだったから工学部にいくつもりでした。ミノルは小さいころからお兄ちゃんの真似をして大きくなってきたんです。お兄ちゃんの背中を見て、後を追いかけて、いつも追いつきたい、一緒のことがしたいと思っただけです。

だから、ミノルはお兄ちゃんと同ジヨバンニに必ず高校に行ってそれから大学に行くようになるって。(だん

だん気持ちがたかぶつてきて涙声になる）それなのに、こんなことになるなんて……。せつかく学校にいけないようになったのに。一生懸命勉強して遅れを取り戻すといっていたのに。本当に小さなころから犬や生き物たちが大好きな優しい子供だったのに。

先生 ミノル君は本当に優しい子供でしたね。人と争うことがきらいな。そのために自分を殺してしまうようなところがあつただけだ。

ジヨバンニ 結局ミノル君は優しすぎたのかもしれない。この社会を生き抜いていくためには強い力も必要なんだ。だから強い力を求めていたのかもしれないな。

織江（突然押し殺していた感情を吐き出すように）優しいのがどうしていけないの。優しいのがどうして悪いことなの。優しいからいじめない。優しいから殺さない。世界中の人がみんなミノル君のように優しくしたら人間同士の争いなんてなくなるし、戦争なんて起こらないだわ！

ミノル君はきつと帰ってくるわ。

ミノル君帰ってくるのよ。きつと、きつと帰ってくるのよ！

舞台上、最初の車掌が出てくる。

車掌 まもなく、銀河ステーション、銀河ステーション、丘の上の星祭り会場広場です。降りる方は忘れ物がないよう支度をしてください。

四人はあわてて席に戻る。ジヨバンニだけが舞台の逆のほうに駆け出したために、遅れて客車の席に戻る。すると織江がジヨバンニが座っていたところに座っている。ジヨバンニはあわててあいている織江が座っていたところに座る。

### 3 星祭り

舞台は丘の上の星祭りの会場、背景の星空には沢山の星が輝いている。そのせいで、不思議なほど明るい。

ジヨバンニが長い竿の先に玩具の犬をぶらさげてウ

ロウロを歩き回っている。竿には幟がついていて、「この犬落ちていました」と書いてある。

織江が舞台中央で、星空を見あげている。

織江 すごい。たくさん星。

ジヨバンニ こんなに星がたくさんあるやていつも忘れていて気がつかないからね。

織江 そやけど、こうして見えている星の多くが、今この瞬間には無くなっているんですって。

ジヨバンニ (驚いて織江のほっを見ながら) え、

織江 銀河系宇宙は、地球から約四十億光年離れたところに広がっているんだよ。だから私たちが見えている星の光は四十億光年前の光をみているということでしょう。星の寿命ってだいたい十億年から長いもので五億光年ぐらいやから、あの光っている星の多くはもうこの世にはないって訳。

ジヨバンニが突然下を向いて、指を折りながら、何か一生懸命計算している。

ミノルの母親が上手から舞台に出てきて、ジヨバンニのもっている竿の先の犬をみている。

ジヨバンニと織江がミノルの母親の顔をしばらく見ていたが、おたがいに顔を見合わせる

織江 (母親に声をかける) ミノル君のおかあさん？

母親 え、？(不思議そうに)

織江 川で流されて死んだミノル君のおかあさんでしょう。

母親 ミノルは死んでなんかいませんよ。ちゃんと生きていますよ。

ジヨバンニと織江が驚いて顔を見合わせる

母親 そういえば、川で流されて死にかけたことはあったけど、でもあれはもう随分前のことですよ。

ジヨバンニ ミノル君も来ているんですか。(周囲を見回す)

母親 去年までは、この日はいつも一緒にきていたけど、今年に大学に入って東京にいるから、やっぱりこられなかったわ。

ジヨバンニ なんや、それやったらミノル君はほくより一つか、二つ下の年や。川で溺れたんはたしか中学三年のときでしょう。

母親 (思い出すように) 確か、そうね。

織江 ミノル君は川に流された子供を助けようとして、子供は助かったけど自分は行方不明になってしまったんでしよう。

母親 (驚いて) そう、ミノルも行方不明になったけど、たまたま近くにいた先生が助けてくださったって

織江 (少し感激したように) ミノル君は生きていたんやわ。私があの時本当に呼び戻したからミノル君は助かったんやわ。

母親 病院で意識が回復した時は、本当に私も神様に感謝して泣いてしまいました。でも、ミノルは後で不思議なことをいってしまいました。意識が回復するとき、不思議な声を聞いたんですって。死んではいけない。帰ってくるのよって。女の人の声が

ジヨバンニ あ、それはミノル君が流されてから三十日ほど後のことだったんですね。

母親 いいえ、そんなに長いことは。でもそうね、ミノルが病院で意識が回復するまで三時間ぐらいかかったかしら。

織江 (ジヨバンニと顔を見あわせ) え、そうなんですか。そうやわ。三十日も意識がなかったら大変よ。そうなんやわ。でもやつぱり不思議なこともあるんやわ。よかったわ。感激したわ。

母親 ミノルもあれからすっかり強い子になってたぶんあのことが、川でおぼれている子供を助けたことが自信になっただんです。

織江 きつと、いじめられていた子ほど本当はつよいんやわ。  
母親 え、？

ジヨバンニ ミノル君はやつぱりお兄ちゃんと同じ大学に行っただんですか

母親 (ちよつと不思議そうに) え、ええ、まあ。あ、そうそう、その犬のおもちや、落とし物ですの。

ジヤバンニが竿を下ろして、犬のおもちやを母親にみせる

母親 ああ、やっぱり、これ、ミノルが助けた子供が持つていてそれでお礼の記念にもらったんです。大切にもつていたんだけど、いつのまにかなくなったといって捜していたんです。

ジヨバンニ そうやったんですか

母親 へんな玩具でしょう。犬のくせにお腹を押すと人間が笑うように笑うんですよ。でも、これどこにあったんですか。

ジヨバンニ (織江の顔を見ながら) 下の公園のベンチにあっただすよ。

母親 おかしいわ、こんなところにあるなんて。でもこれだわ、これにまちがいないわ。はっきり覚えてるわ。

ジヨバンニ じゃあ、まちがいないですね。

ジヨバンニが犬のおもちやを母親にわたそうとする。  
。その時、また犬のおもちやが突然笑う。びっくりしてジヨバンニがおもちやを落とすと、おもちやは斜面をころがるように舞台をころがって脇へ消える。

母親 あら、大変。(あわてて、犬をおいかける)

ジヨバンニと母親は犬をおいかけて、舞台から脇へ入るが、しばらくしてジヨバンニだけがまたでてる。

織江 (星空を見上げながら) ケンタウルスの星って、どれかしら。

ジヨバンニ ケンタウルスは銀河の岸に集まっているんだ。

織江 ケンタウルスの星は、ミノル君やカンパネルラさんのように他の子供を助けようとして川に流された子供を捜すために集まっているのよ。きっと

ジヨバンニ ミノル君は帰ってきたけど、カンパネルラは帰ってこなかった。

織江 私ね、こうしてケンタウルスの星や、たくさんの銀河の星をみていると、ジヨバンニさんのおじいさんや、カンパネルラさんといっしょに銀河の鉄道に乗って旅をしているような気持ちになるの。

ジヨバンニ 君は本当にカンパネルラさんが好きなんだね

織江 だって、あの時カンパネルラさんが助けてくれた子  
供は私のおばあさんですもの。

少しずつ暗くなって、二人の姿は見えなくなる。

(幕)